

獨逸通信 第9

小田大吉

田中先生

フランクフルトより

南西獨逸耳鼻咽喉科學會第25回集會

3月7日にフランクフルトから25キロほど離れたタウヌス連山の裾のデアバード・ゾーデンの「デアハウス」で此學會が開催されました。6日の夜は8時から「ベグユースング」、フオス教授は「ブリパート」患者の小さい「パロネス」が様子が悪いので、翌日おそく會場に見えました。小生はショルツ君の自動車でゾーデンに行きました。フオス教授から、「シュリフトシュテッレル」のレヨベル教授(マールブルク)アルブレヒト(チュービンゲン)グラエ(去年シュトウツガルトの新しい市民病院の耳鼻科長となつた)その他スピース教授の門下に紹介されました。一所に「ビール」を飲んで居ますと、シュトウツガルトから來て居る開業醫が、シッレルがカルルス・シューレに居た時は醫學生だつた、そして卒業試験に落第した。其の問題が「迷路は液體を以て充されて居るか」と云ふのだつたと云ふ様な話をきかせてくれて面白かつたです。其の内フランクフルトからよばれて來て居た「オペラ」歌手の歌が終ると、婦人連中は踊りたくなつたらしいですが、冬の間に閉鎖されて居た「デアハウス」ですから「カブレ」が居ません。座長(これは専門醫でなく、バード・ゾーデンの醫師會長が「フオアジツター」として世話をして居ました)が、『踊らうと思ふのですが、音楽がないから、誰か御婦人の内で「ピアノ」をひいて頂けませんか』と云ひますが、誰も出ません。ところが、このおちいさん、『それでは私が』と出て行つて、「ウィーナ、ヴァルツター」を弾きます。仲々うまい。皆よろこんでしまつて、盛に踊

りました。ウフェノルデ教授は、仲々上氣嫌で、盛に踊つて居ました。ショルツ君は、始めは「タンツ」なんかと云つて居ましたが、其の内、昔の「コレーギン」だつたと云ふ女醫夫人に5年目に會つたと云ふので、忽ち前言を翻して、盛に踊つて居ました。其の夜私は、ショルツ君とゾーデンに宿をとり、翌日から始まつた學術演説に出席いたしました。演舌は、

1. Herr Marx, (Würzburg) Über den Nachweis der Genese der Meningitis.
2. Herr Richter, (Erlangen) Über Empyem-enbrüch ins Innenohr.
3. Herr Schmidt-Hackenberg, Karies des Jochbeins bei Mittelohreiterung.
4. Herr Mittermeyer (Freiburg) Zur Technik der Gleichgewichtsdrehprüfung.
5. Herr Sann, (Stuttgart) Der Einfluss von Röntgenbestrahlung des Ganglion Stellatum auf Hörstörungen.
6. Herr Grahe, (Stuttgart) Erfahrungen mit Fröhntonsillctomie.
7. Herr Weser, (Stuttgart) Tonsillctomie bei diphtherischen Folgezustand.
8. Herr Löbell, (Marburg) Facialisparese-frühsymptom.
9. Herr Voss, (F. a. M.) Interessantes aus der Begutachtung. 等で

其の他まだ演題はありましたが、演説しませんでした。中には想像的な演説もあり(5番の如き)又長々とやつて、聴衆から遂に足を「ガタガタ」やられて、(獨逸人はあまり行儀よくないですね)また頑張つて笑はれたりしたのもありますが、一般に演説は齒切れがよく、持つて來てる材料は豊富で、幻燈を盛に用ひ、討論が實に盛で仲々活氣があります。9時から始まつて、11時に20分程休んで、

「ツワイテ・フリュージョットユック」をとり、又始めて、午後1時頃までやりました。

マルクス教授は、以前、中耳炎に罹つたことはあるが、近來何の病状もなかつたものが、急に腦膜炎の症状の下に死亡したので、組織的に検査してみると、鼓室には炎症は既に見られないが、錐體骨蜂窩炎があり、之が硬腦膜内に破壊して、腦膜炎を起して居る。所がこの「プロセス」は、一方後半規管に破壊して、極めて新しい迷路炎を起して居る。若しこの例が、死亡直前に耳鼻科醫によつて検査されたならば、恐らくは迷路炎性腦膜炎と診断されるであらうと述べ、臨牀的に迷路炎性腦膜炎と診断されるものの中には、斯るものもあり得ることを指摘し、(同教授も腦膜炎の原因として錐體化膿を重視して居ます)面白い標本を示されましたが、この例は、死亡埋葬後6週間にして、保険關係のため發掘鑑定を命ぜられて、發掘後、組織検査をしたのださうですが、組織のよく保存されてるのには驚きました。

之に対してエルランゲンの講師リヒテル氏が、其の致宅の頭蓋内合併症 117 例の統計を上げ、又剖検例中、錐體骨蜂窩より傳染せるものが多かつたことを追加し、(立派な標本をもつて居ました)尙ほ其の傳染經過並機轉に就て論じ、(これも面白い標本を澤山示しました)更に誘導性迷路炎の問題に觸れますと、ウフェノルデ教授は立つて、小兒の中耳炎の際の誘導性迷路炎の少ないこと、(「ラテンテオチチス」の剖検例で 50%)並に自分の組織的検査の成績よりして、これを聾啞の原因として重視す可きことを強張しますと、マルクス教授は、ウフェノルデの云ふ所は興味深いことで注意を要するが、このことは、病理解剖の材料のみを以ては論ぜられない、臨牀的には 50% もそんなものを認めることは出来ないと、結局ウフェノルデに反対しました。

次にリヒター氏は鼓室上索前上方、迷路周圍、迷路下方、迷路後方それより錐體骨尖端にかけて蜂窩の發達して居る組織標本を澤山示し(腦膜炎屍)迷路内破壊を論じ、手術處置に就て殊に迷路周圍蜂窩の發達状態及び其の徹底的な處置の必要と其の方法に就て論じますと、いろいろな意見が出て、大分盛に應酬しましたが、ウフェノルデが、蜂窩は系統的に除かなきやいけない、何でも簡単に根治手術をやつたから好いと云ふものぢやないが、迷路と「ブルブス」の間に蜂窩がある時は、根治手術を行つてこれを追及しなければならぬと云ふと、マルクス教授は、(この方は好いおちいさんで大分保守的な方らしいですね)グラデニゴの症状群も、よく單に乳嘴開放で治癒する、錐體骨蜂窩化膿の際も「アントロトミー」で充分なことが多いと云ふと、ウフェノルデは又「アントロトミー」後、更に疼痛があり、前方より排膿ある際には根治手術の必要あることを主張し暫く押問答をやりました。尙ほ「ベリラビンテール」と「トランストラビンテール」を取りまぢがえて、見當違ひの討論をするのが出たりして滑稽なこともありました。

次の中耳化膿の際顙骨の「カリエス」と云ふのは、顙骨内に異常に發達した蜂窩に起因する「カリエス」と思はれ、皆それを指摘するのですが、演者は大分時流を超えて開業してお医者さん見え、頑として中耳炎に關係がなかつたと主張しました。獨逸にもこんなお医者も居るかなと思ひました。

7番の「デフテリー」後の扁桃腺摘出問題(要するに保菌者及び「デフテリー」後麻痺に對して、扁桃摘をやれと云ふことですが)には、問題の性質上、澤山討論がありました。中で、「パチレントレーゲル」では、口蓋扁桃腺よりも、むしろ咽頭扁桃腺に菌の残つてることが少くないから、「アデノト

ミー」も必要であると云ふ意見がありました。これはバルベックで、咽頭扁桃腺の「ヂフテリ」の標本を澤山見た私には、成程と思はれました。

レベル氏は、顔面神経麻痺の早期症状として、著明な麻痺の現はれる前に、瞬の数が少くなることを指摘し、其の3例を活動写真で示しました。

グラエは50幾例の経験を基礎として、扁桃腺周囲膿瘍に對して、膿瘍時に摘出をして何の危険もなかつたこと、又摘出を怠つたために、全身傳染、其の他の合併症を來たした経験等を述べて、膿瘍を有するものには、直に扁桃腺摘出を行ふ可しと述べ、これには色々討論質問がありました。丁度其の時見えたフォス教授が、『諸君、今討論しておいでになるのは、「アブセストンジレクトミー」ですか』『さうです』（この邊、學會と云ふよりも座談會と云つた様な氣分です）『さうか、そんなら議論の餘地はない、やつて御覽なさい、術後の経過は好いし、いやなことは一つもないから』と、それで討論もおしまひになりました。

最後にフォス教授が、他の「クリニック」で鑑定して、器質的變化無しとせられたものを、自分の方で検査して見ると、器質的變化があつたと云ふ3例の鑑定例をあげて、鑑定に関する色々な注意をのべられました。これは「レンテン」問題（「クリーグスレンテン」、「インヴァリートレンテン」等）の、やかましい獨逸の社會的施設に關係した問題として興味をおぼえました。

閉會後、「ターハウス」で晝食があつて出席しましたが、フォス教授は、この學會の創始者であるらしく、この會が25回目の由、此席でフォス教授は創設以來を回顧され、最後に『フォスを諸君忘れないでくれたまへ』と云ひながら乾盃されたので、殊に出席の婦人連中よこんでしまつて、『今日のフォス教授の演説は「ニートリヒ」だつ

たと話しあつてるのをききました。フォスと云ふ方は、皆からとても敬愛されて居らるらしいですね。醫師會長のお嬢さんが、赤い「カーネーション」を澤山もつて來て、出席の婦人連中に、「本づつ渡したり、市長が演説したり、それから午後は、タウヌの山の中のバード・ケヨーニツヒシュタインの市長招待のお茶に招かれて皆で出かけた。り、小さいながらも、いかにも西洋の學會らしい氣分でした。

この機会にウフェノルデ教授に見學のことをたのんで快諾を得ました。マルブルクには、去年金野君（岩手醫專）が行つて、非常に好い印象をのこしたらしく、先生もレノベル氏も、一所に來てた2人の助手も、懐しさうにコンノの話をして居ました。

フランクフルトに來た頃は「カーニヴァル」の舊教の時期で、2月の9日にはこの最盛な催がありました。學生もそちらに遊びに行つてたらしく、講義もいつも100人以上の學生が、「ローゼンモンターク」の翌朝は、20人位しか居ません。フォス教授が「プラクテカント」を「ヘア」何々、「ヘア」何々、「フロイライン」何々とはれても、居ないのが多い。其の度に先生も、『ヤ、エア、イスト、イン、マインツ』『ア、ジー、アウホ』と云はれるので、出席の學生皆よこんで笑つて居ました。

私はシュルツ君夫婦と、一晚町の様子を見に行きました。この「プロテスタンテイッシュ」のフランクフルトでは、あまり「カーニヴァル」は盛ぢやないと云ふことですが、それでも私共が見ると、岡山の春のお祭りなどより、よほど盛で、大人から子供まで假裝して「マスク」をかぶり、いたる所の「ローカル」で踊つて居ます。そして「カベレ」が「ラインレンダー」を奏樂して、群集は皆腕を組んで歌つて居ます。シュルツ君の妻君が『何と云つてるかわかりますかと』聞きますから、能く聞い

て見ると『ナッハ、ハヴゼ、ナッハ、ハヴゼ、コンメン、ウイア……………ニヒト』と歌つて居ます。ローマベルク(あの立派な「ラートハウス」のある所、先生能く御存じと思ひます)の一隅で、5、6百年前の「パトリシアン」の家だつたと云ふ、「ルネッサンス」の建物の中の酒場で暫く座つて、それから一つの「カフェー」に行つて見ましたが、皆面白さうに踊つて居ます。ショルツ君は『今夜は澤山「フロイドシャフト」が結ばれるだらう』と妻君と囁いて居ました。病院でも、「キンダークリニク」では、「カーニヴァル」の間、子供が假装してよこんで居ます。

フランクフルトの町は、日曜日毎に歩きまわつて見ましたが、マインの川の岸だの、ローマベルクを中心とする中世期的な家だの、古いお寺、立派な「ゴーチック」の「ドーム」の塔だの、すっかり気に入つてしまいました。

ハンブルグでは、とても寒くて、暗かつた獨逸も、2月の終りになると段々寒さがうすらいで、少しづつ日が長くなって來ました。雪だけでせうか、マインツの川も増水して、濁流滔々として、近所では氾濫した所もあるらしく、いつかの岡山の洪水を思ひ出しました。冬がれの淋しい河岸の景色でしたが、それでも日が當ると「ボカボカ」暖く、早く春になれば好いと思ひました。

市立の美術館に行つて繪を見ました。ヴァンダイクの「マドンナ」が、この美術館で一等な繪だときいて居ましたが、實際見るまでは、こんなに立派とは思ひませんでした。その他ルーベンス、デュラーの繪が少しづつではありますが見られますし、佛蘭西の、後印象派の繪が、大分ありました。しかし一番私の印象に残つて居るのは、矢張ウアンダイクの「マドンナ」です。繪畫が、こんなに人の心に印象を興へるものとは思ひませんでした。これが繪のわかる人だつたら、どんなに嬉し

いでせう。尙ほシュタインハウゼン教授のお父さんの繪を大分見ました。伊太利旅行中の、ゲーテの肖像……………ヴィア・アピアを背景にした……………の繪の「オリジナル」も此處にあります。ゲーテの生家にも行つて見ました。ゲーテが7、8歳の時に改造されて、「詩と眞實」に書いてあるのは少し變つて居るらしいですが、幼いゲーテがよく廻りをのぞいて居たと云ふ窟のあたり、ゲーテがワイマールの宮廷に行くまで、幾多の作品を物した書齋など、随分以前よんだ「詩と眞實」を思ひうかべながら歩きまわりました。其の頃の富有な、「フランクフルター」の住宅として見るだけでも、興味深いものがありました。

フランクフルトは又古い獨逸を示すと共に、新興獨逸の姿をももつて居ます。I. G. の大工場がある(これは見に行きませんでした)大きな「フルーグスハーフェン」があり、「ツエッペリン」の格納庫があります。そしてフランクフルトは、「ライヒス・アウトバーン」工事の起點であり、又失業者に材料を貸し、専門家が指導して自分で建てさせ、幾年か少しづつ拂ひ戻せば自分のものになると云ふ、小さい住宅地等、新しい獨逸の姿の一片を見る事が出来ました。

ショルツ君は仲々深切で、自分の自動車で、(獨逸人は金が無いとか、生活が苦しいとか云ひますから、「クリニク」でも、教授は大抵立派な家を持つて、立派な自動車を持ち、「オーベルアルト」も大抵自動車を持つて居ますし、「アシステント」諸君も、「セカンドハンド」ながら、自動車を持つてるのが澤山有ります)日曜日には方々連れてつて呉れました。タウヌスの山の中の温泉、バード・ナウハイム、バード・ケーニッヒシュタイン等にお茶を飲みに行きました。フランクフルトは、少し春らしくなつても、この山の中には深い雪がありました。獨逸人は速足が好きですが、向ふに行

つても食物は持つて行つて、「カフェー」で「カフェー」をとつて飲むだけだし、皆自分の分を拂つて済しこんで居りますから、獨逸人との交際は、金もかからないし、氣兼ねがなくつて好いです。ケーニッヒスシュタインの近所には、大戦後フランスの駐屯部隊の兵營であつて、今は「アルバイトデーニスト」の宿泊所になつて居ると云ふ建物を、ショルツ君指しながら『自分達が食べるものもなく、穿く靴も無かつたのに、佛蘭西人は、こんな建物を我々の金で建てたんだ』と其の頃の苦しさを述懐して居ました。

ケーニッヒスシュタインには又古い城の廢墟があります。これは7年戦争の時に、佛蘭西人に爆破されたのださうですが、綺麗な「ルイネ」で、上から見ると遙か向ふに、フランクフルトが見えて好い景色です。

又教室の事にかへりますが、教室を見學してると、何時どんな患者が来るか分らないし、又夜でも何時でも来るから呼んで下さいと云つても、獨逸人の考へに依ると、夜はそんな勉強の時ではないらしく、遠慮して呼んでくれません。仕方がないから、夕方の「デーニスト」にも行つて、教室でやつてる事をすっかり見ようと云ふ事にして、日曜以外は、夜も晝も晝寝と夜寝の時の外は、病院に居ました。面白い手術は、大抵夜時間外です。手術場の看護婦が『アロフェッサー！一體貴下は何時も病院に居て、何時夜の生活を樂むんだ？』と聞きます。『仕事が第一だらうと』申しますと、『ナハト・レーベン」を樂まないものは、大人ぢやない。「アロフェッサー」は子供の生活をしてるんだ。まあ、フランクフルトは田舎だから好いが、ウイーンに行つて、今の様な事をしたら駄目ですよ』と云ひます。小生、大人ぢやないと云ふ事にされてしまひました。それでも土曜に、ショルツ君と2度「オペラ」を見に行きました。フランク

フルトの昔の榮華を偲ばせる様な立派な「ロココ」風の、内部の裝飾はウンテル・デン・リンデンの「オペラハウス」よりも小さいが、より立派な様に思ひました。1度はカルメン、とても「テンペラメントフォル」なカルメンで、私の道心あやしく亂れさうに思ひました。

フランクフルトの教室はまだ見て居ても見る甲斐があると思ひましたが、いづれ月末にはフォス教授は退職されますし、(併し驚いた事には15日に私がお暇乞ひする迄、まだ後任が定つて居ませんでした。色々の政治的意味があるらしいです。)16日には渡邊傳次君が伯林に來ますから、其の下宿の世話に歸りたいと思ひまして、15日ぎりぎりまで居てお暇乞ひをしました。フォス教授のお宅にと思ひましたが、奥さんが御病氣ださうですから教室で御挨拶をして失禮しました。フォス教授は大變親切な方で、15日出發する眞際まで、色々を見せて下さつて、何だか昔から存じ上げてる方の様な氣がしました。妙なもので、改つて話されたり、あまり親しくない人から話される獨逸語は、私の耳には東京の言葉で應待してる様な氣持で聞かれ、それに反して、非常に親切に話されると、それが何だか岡山の言葉か、郷里の訛りで話される様に思はれるのです。それでフォス教授が何か話されると、私は何時でも岡山辯で『あんた、かうしんさい』と云つた調子で話しかけられてる様な錯覺を始終おこしました。フォスと云ふ方は特別に親切な方だと、後でレベル氏も話して居ました。バード・ゾーデンの學會でも、始め私に『ジー、ジント、フロインドリッヒ、アインゲラーデン』と申されましたが、私は唯會費3馬克を拂はなくつて好いと云ふ事だらうと思つて居ますと、ショルツ君がついて居て、「ホテル」から食事まで拂つてしまつて、私にどうしても拂はません。フォス教授のお客と云ふ事になつてるさうです。

全く恐縮しました。厚くお禮を申し上げ、後で又、日本から取り寄せた陶器を贈っておきましたが、大變恐縮しました。愈々お暇乞ひの時に、『田中教授によろしくお傳へ下さい。それから久保教授にもよろしく』と云ふ事で行りました。遅くなりましたが何とも申訳ありませんが、ここにフオス教授の「グルース」をお傳へ致します。

伯林に歸つてからお禮状を書き、御所望頂いた私の寫眞を1葉贈りました所、鄭重なる御返事を頂き、其の中に『貴君が歐洲人化してるから、この寫眞を貴君の「セフ」が見られたら驚かれるだらう』と書いてありました。（1葉御覽に入れませう）尙、矢張り3月31日に、「エミリアーレン」されたらしく、4月1日から「ルーヘ、ツーシュタン

下」に入つたと書いてありました。後任はチュービンゲンのアルブレヒトの「オーベルアルツト」、「プロフェッサー」シュワルツ——これは「モルフォルグ」で主に遺傳をやつてる人——がなりました。尙、私がお禮状の中に、さう感じた儘、「佛心鬼手」の事を紹介しました。『日本人は、醫師の精神と醫術の「グライヒニス」をさう解釋するのです。そして貴下の所で「ホスピタリレン」してる間、貴下のなさる事は、何時も私にこの我々の古い格言思ひ出させました』と書きました所、ショルツ君に後で會ひますと、フオス教授は、小田がこんな手紙を寄越したと云つて、何時か招待の時に讀んで聞かされたさうです。

◎ 訂 正

本誌第 575 號（第 49 年第 11 號）所載の菊澤隆尙君の論文「カルシウム」ノ腦下垂體前葉ニ及ボス影響ニ關スル實驗的研究の歐文抄録は誤載なりし爲め第 576 號（第 50 年第 1 號）に於て別刷として挿入訂正し置きたり。